

新書

太閤記 三

吉川英治



新書太閤記

老川采玄

太 閤 記 (全八卷)

第 三 卷



昭和32年9月5日 初版発行

昭和48年5月31日 第54版発行

著 者	吉 川 英 治
発 行 者	吉 川 文 子
印 刷 者	守 安 巖
印 刷 所	東京印刷株式会社
発 行 所	株式会社 六興出版

東京都文京区水道2-9-2

電話 03 (943) 3431~3

振替口座 東京 92448

落丁、乱丁本は本社で御取替え致します

© by E. Yoshikawa 1957 TOKYO Printed in Japan

定価は帯に表記してあります

0093-00308-9216

目

次

伊勢軍功帳	三
於市・於虎	二四
大義	二六
二十一日記	三〇
七番樂	三七
建設の音	四三
堺町人	四九
名器	五九
北征	六九
露のひぬ間	八三
琴線	九二
姉川	一〇一

兩面將軍……………	二二
觀 山……………	二三
東風吹く一隊……………	二三
獅子の乳兒……………	二四
卑屈茶わん……………	二四
四面楚歌……………	二五
伏龍悶動……………	二六
毘沙門堂主……………	二七
雁 と 燕……………	二八
權 化……………	二九
時々刻々……………	三〇
三方ヶ原……………	三〇

出(まんじ).....	二九
天放無門.....	三四
田園の一悲母.....	三九
君臣春風.....	三四
舊閣瓦解.....	二四三
去りゆく人々.....	二四九
お市の方.....	二六〇
母の戦い.....	二六八
説客.....	二七六
珠.....	二八六
さむらい集い.....	二九七
未来の女性.....	三〇六

母 と 妻……………三三

樂しみここにあり……………三八

とらと虎……………三八

(姉川 役圖)……………一九

(三方ヶ原役圖)……………二三

新書
太閤
記
第三卷

題 裝
字 幀

吉 杉
川 山
英
治 寧

伊勢軍功帳

いつまでも、燃え限れない粗穀の煙りや米の焼ける匂いが野をつつんでいた。ゆうべから夜明けにかけて漸く占領した部落に、織田軍の本部はもう移つていた。眞つ紅な桃畑も黒く見える。負傷者の群れがそこに呻きあつていた。負傷した將兵は半分氣が狂つてゐるように、

「何だとツ。逆襲せが來たツ？」

「おれを起たせろ」

「これしきに、斃れて堪るか。もういちど行つて、一働きせねば」

天を向いて喚いていた。

薙を敷きならべ、何十人となく、朱になつて寝かされてゐるのである。元より身動きもできない深傷ばかりだが、氣が立つてゐるので、口だけは、各々、今も戦つてゐるように、怒號もすれば、齒ぎしりもする。そして、どの眼も、刮と大きく、眞晝の雲をにらんでいる。

桃畑の外れに、庄屋の家がある。家は大半焼け落ち、焼跡の井戸のそばには牝牛が焼け死んでいた。悲しげにうろつてゐる仔牛の聲が耳につく。すぐ側の陣幕から顔を出した將が、

「うるさいな。おいッ、この仔牛をどうかしろ」

と、呶鳴ると、足輕の一人が、槍の柄で仔牛のしりを力まかせに打つた。仔牛は、菜種畑へいつさんに駆けたが、畦の小川に落ちて、なお悲しげに啼きぬいていた。

幕の外に立つてゐる歩哨の兵が、それを見て笑つた。——が、急に、嚴肅な顔へ戻つて、内から聞える聲に耳を敏てた。

楯や陣幕を繞らしたその本部の中では、さつきから激論が交されてゐた。夜明け方、嚮をならべてこの村へ這入つた各部隊の將星たちが、端なくも、これからの作戦上に、意見の相違を來して、互いに譲らないためらしい。

瀧川一益は、桑名、蟹江の二城を指揮して、早くから伊勢と對峙してゐたこの方面の主將であるから、彼の決裁に待つていいはずであるが、僅

「いずれにも一理はある」

と、のみで、敢えて彼はそのどつちへも、賛否を明らかにしなかつた。

論争は、ここ二十日はどの間に、前後して、伊勢の戦野に参加した新銳の援軍の將たちの間に闘わされて、一部は、

「伊勢の南を先に席卷して高岡の城は、後にすべし」と、

という意見であり、一方は、

「いや、敵が難攻不落と恃む高岡の城こそ、先へ懸つて攻め落すべきである」

と、いう二者の對立だつた。

前者の意見を抱く人々には、

熱田の加藤圖書、愛知郡の飯尾隱岐守、岐阜城の物頭早川大膳、篠田右近、春日井郡から馳せ加わつた下方左近將監——などがある。

「易き地を先に攻めて、至難の地を後にまわすのは、

遠征の策ではない。北伊勢の嶮、高岡の城だに墜してしまえば、恃みの中心をうしなつて、餘の北畠一族は、四散滅裂すること、火を見るよりも瞭かである」

との説を以て、それらの人の意見に反對しているのは、つい四、五日前から參戰した木下藤吉郎であつた。

最も遅く參戰したものが、最も強硬に自説を云い張るので、それも多少、前者の部將たちの感情を刺戟していた。

「智略の聞えある木下殿のお説とも覺えられぬ。高岡の城は、北畠随一といわれる豪將山路彈正がこれを守り、その兵は強く、地勢は嶮、いかで口先で貴公が云わるる通りに簡單に陥ろうか。——味方の全軍が、わずかに一城に懸つて、日を過すうちに、神戸、一色の敵軍が、退路を斷つて、包圍して來たら何と召さるか」飯尾隱岐、下方左近將監などの老練の將は、藤吉郎の策を若い逸り氣として、叱るが如く云つた。

「いや、それがしは、木下殿のお説を至極と思う」

とて、彼を支持する者も一部にはあつた。

池田勝三郎信輝。

その他二、三の將である。

明智光秀も、その中にいた。けれど新參だし、わけはまだ一士隊長にすぎない光秀は、當然、作戰の議に、嘴をいれる資格はない。池田隊附の一將校として、信輝のうしろに默然と立つていただけである。

議論は、果てしがない。

といつて問題は、重大である。全軍の死活は、この

二つの方針を、右するか左するかに懸つていた。

瀧川一益は、思慮ふかい男である。この上は信長の意見を抑いで決するほかあるまいと云う。

岐阜城まで、早馬をとばせば、日数とても幾らもかかるまい。高岡へ攻め懸るにしても、南伊勢へ進路をとるにしても、この附近の敵を掃蕩するには、なお幾日かはかかる。

「——その間に、御返辭もつくし、猶、熟慮の暇もあれば」

こう一益が、中庸を取つたので、論議は熄んだ。

そして急使の馬が、岐阜城へ數騎急いだ。

ところがその晩。

一度、退いた敵軍は、闇と地の利を計つて、逆襲してきた。瀧川一益の隊は、その中軍を衝かれて、二里も退いた。

その他、飯尾、加藤、下方などの織田軍は、聯絡を失つて、支離滅裂した。——夜が明けてみると、死者、傷者、夥しい數にのぼつたのみか、ここ七日ほどで、せつかく有利に進んで來た全線の體形が、まったく亂れてしまつた。

「木下隊と、池田隊が見えぬ。——全滅したのではな

いか」

敗色の濃い織田軍のうえに、更にこんな聞えが高まつた。

一益は驚いて、調べさせていると、飯尾隱岐守と下方左近將監のふたりが、陣地から傳令をよこして、

「——昨夜、亂軍中、木下、池田の二隊のみ、敵の右翼を突破して、敵の北地へふかく進んでしまつた。察するところ、我説を曲げず、君命を待たず、高岡の城へ懸る考えと思われる。——如何すべきや？」

と計つてきた。

やむなく、一益は、

「この上は、彼等を先鋒とし、われわれは後卷して、進むほかあるまい。さもなくば、戦いの後、木下、池田を見殺しにしたと云われよう」

不平もあつたが、ために、織田方はひきずられた形で、木下、池田の先鋒に従つて、午後から動き出した。そして、敵の高岡城へ、もう四、五里という邊りまで來てみると、いちめん空は黒煙に塞がっていた。

物見をやつて、

「合戦か。何の火か」

見せにやると、その物見が見届けて來たはなしには、

「木下殿の隊は、高岡城下の町屋へ火を放ち、池田隊は、手分けして、田や畑をふみあらし、穀倉を封じ、城内への通路へ柵を結び、すべて高岡城を繞るものを取り拂つて、孤立にする作戦の下に働いています」

との事だつた。

「敵は」

と、問えば、

「城兵は、屢々出て、それと戦つてはいますが、この風に、火の手のまわり早く、町屋や部落のみか、野も山へも、燃え擴がつて來たので、城門を閉じ、飛火の防ぎに、手も廻らぬ様子に見えます」

と、物見は答えた。

夜に入ると、風はやんだが、火はなお燃えやまず、數里の後方に陣していても、兵馬の影が赤く見える程だつた。

六晝夜も燃えつづいた火に、高岡城はまつたくの裸城となつた。城外の田野民屋、みな焼野原と化してしまつた。

藤吉郎の軍三千は、遠く退いて、後はただ城内との交通を固く遮斷しているだけに過ぎなかつた。

北伊勢八郡の兵は、みな城主山路彈正の手足だつた

が、城内との聯絡が取れないため、その力は區々に分裂されてしまつた。

「潰滅の兆が見えてきた。その方面の敵は、不肖池田勝三郎が當つて蹴ちらしてみせる」

藤吉郎と行動を共にした池田隊は、その機に乗じて、北八郡の大兵へ、敢然、軍を進めて行つた。

後陣の瀧川、加藤、早川、下方などの諸隊は、先鋒軍の木下、池田の二隊が、今に全滅の傷手を負つて退くだろうと、味方ながら、むしろ冷やかに見ていたが、そのうちに、岐阜本城から早打ちが戻つて來て、

「高岡の城を先に攻め陥すこそ上策なれ。猶豫あるな」
との指令であつた。

同時に、

「一舉、伊勢を併合せん」

という意氣ごみで、信長自身、約五千の軍旅を整え、伊勢へ向つて、出陣してくるとの報もあつた。

一盆たちは、自分等の意見とは案に相違した信長の指令に、遽かにあわて出して、木下、池田の二隊に協力し始めたが、こんどは藤吉郎が、

「味方より手出しあるな。敵より弓、鐵砲など射かけて來ても、退くはよいが、相手に出るな」

と、嚴命した。

十日も経つた。城兵共は決戦に焦心^{あせ}つて來たが、寄手はただ裸城のまわりを遠巻して、

「一日経てば、一日の勝」

と、戦いを避けていた。

やがて、信長の本軍が着いた。——池田勝三郎の隊は、北伊勢の山岳地方へふかく這入つたまま、消息がたえていたので、

「ここはよし。彼の軍を救援に赴^{おもむ}け」

と、下方左近將監、加藤圖書、早川大膳^{だて}など無慮七、八千の兵力をその方へ割いて、愈々、本格的な伊勢攻略を開始した。

そして、當面の高岡城へは、

「明朝、夜明け方より、總攻撃にうつれ」

と、命を發した。

「いけません」

藤吉郎が又、反對を唱えた。

「糧道を斷たれ、城外との聯絡を斷たれて、孤立の城兵は、上下みな死を決しています。まして伊勢の俊傑^{しゅんけつ}、城將山路彈正は、よく兵を用い、武略に長け^た、誓つて、一死を共にしようとしている者共ばかりです。——こ

れに當れば、御味方の損傷は少なくてはすみません。いや、屍山血河^{しきんけつが}を見ても、猶、墜^おちないかもしれません」

信長は、聞くと怒つた。

「何だ。今となつてその説は。それは瀧川一益などが大事を取つて申した説で、汝^まの策は、それに反對であつたはずではないか」

「そうです。——然し、それも次の一策があつての事です」

「次の策とは」

「それがしに、使いをお命じ下さるなれば、敵をも救け、味方の一兵をも損せず、平和裡に、高岡の一城を、主君のお手に收めて参ります」

「よし、行け。——總攻めの日には明後日の朝まで待とう。その間に、見事、血を見ずに城を陥すか」

「廣言ながら——」

藤吉郎は、翌日、郎黨ひとりに馬の口輪を把^とらせ、ただ一名、焼野原をトコトコ駈けて、高岡城の濠際^{ぼろ}まで進んで行つた。

敵の高岡城をそこに仰ぐと、藤吉郎は、駒を降りて、郎黨の手に手綱をあずけ、ひとり濠の縁まで進んで行

つた。

「城方の衆へ物申すツ」

大音をはりあげて云い出した。右手を、口のそばに翳し、片方の腕を鎖腰につがえて、

「それがしは、織田信長の臣、洲股の木下藤吉郎なる者でござるが、生命を奉じ、城主山路殿に直々會い申さんために、これまで参つた。——山路彈正殿に、御意得とうぞんずる。山路殿はそれにお在さぬや！」

と、呼ばわつた。

そして、返事は如何に？ と見ていると、城の狭間や土塀のうえや櫓のあたりに、忽ち無數の首が集まつて、藤吉郎の方をながめていた。

「何だ？ 變なやつが来て、濠端でどなつているぞ」と、その短身小軀な風采と、それに似ない大膽不敵ぶりとを、怪訝り合つて騒めいているものようであつた。

いつ迄も、返辭がないので、藤吉郎はふたたび、

「やあやあ、北伊勢の衆には、耳がないのでござるか。

織田の臣、木下藤吉郎なる者、これまで参つた由、早早、彈正殿へお傳えあれや」

——云いも終らぬうちだつた。彼の足下の濠水に、

二、三發の銃彈が魚の蹴ねたように水をあげた。

藤吉郎は、一尺も動かなかつた。耳のそばを、ひゆるツ——と掠めた彈もあつた。

鐵砲の音はすぐ止んだ。城兵は元より狙撃したのではない。彼の度胸を試してやろうと擲擲つたものである。その間に、城主の耳へ報じられていたものとみえて、山路彈正のすがたが、櫓に見えた。

彈正も、そこから大音で、

「木下藤吉郎とやら、山路彈正は此の方であるが、信長の使いとは、何事を申しに來たか。兩軍合戦のまつただ中、信長から慰勞をうくる理由はないが、それにて申してみるがよい」

と、云つた。

藤吉郎は、遠く一禮して、

「いや、いやしくも某は、戦いに勝つた織田方の使者でござる。貴下は、孤壘に據つて、なお千餘の勇猛を擁し、北畠家の忠臣をもつて任じておらるるが、事實に於いて、敗軍の將である。——敗軍の將が、勝利の使者を、城下に見下して、物を問うも異なものである。——ここでは主君の意を申すわけに相成らん。それがしを城内へ迎え、正當の禮を執られたい」

聞くと、彈正は、

「あははは。わはは。——見たところは小さいが、愉快な大言を吐く男ではある。敗軍の將とは誰をさしているか」

と、手を打つて笑つた。

城主の笑い聲に、何の意味ともしらず、彼方此方で城兵たちも笑つた。藤吉郎は、默然と、滿城からわき起る嘲笑をあびて立つていたが、臆て又、

「憐れや山路殿には、武勇にかけては、伊勢隨一の聞えもあるが、惜しいかな、匹夫の勇とみゆる。——死ぬばかりが勇者也と心得ておらるるとみゆる」

「なに」

彈正は、怒つた聲で、

「この彈正を、匹夫と申したな」

すかさず、その怒氣へ、藤吉郎は早口で、云い返した。

「匹夫はまだ、生命の貴きを知っている。貴下のごときは、生命知らずの野猪に過ぎん。——この城にしがみついて、後幾日の生命を保ちうるとお思ひあるか。城下の十方はすべて焦土、糧道なく、水の手は涸れ、しかも援軍の來るお見こみもまずあるまい。——曳か

れものの小唄よ、はははは」

彼の笑い聲も、負けずに大きかつた。その白い齒が、濠をへだてた城樓からも見えた。

なに思つたか、彈正は、

「おもしろい。然るべき男とみえる。鄭重に案内して、城中へ通せ」

櫓に居あわせた左右の者にいつけた。

濠の唐橋は、焼け落ちていた。やがて一人の部將が大手門のわきから筏を出させ、十名ばかりの兵を乗せて迎えに來て、

「織田家のお使者。殿が會おうと仰しやる。お乗りなさい」

と、下から云つた。

藤吉郎は、駒と郎黨一人を、そこに残し、ただ一人、それへ乗つた。

城内の通路は、左右、槍ぶすまであつた。餓死しても守りきると覺悟している城内の將兵だけに、一人の藤吉郎を見ても、その眼は殺氣立っていた。

櫓の下邊りに、城主山路彈正は床几をおいて待つていた。

藤吉郎は、敵の主將を、初めて間近かに見たが、會